
平成 25 年

7 月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下 10 農林事務所農業普及課と農業革新支援センターの取組～



岐阜県農政部農業経営課

活力ある新産地づくり

中濃農林 ■ 円空さといも **円空さといも栽培研修会の開催**

円空さといもは、夏季以降の管理が品質と収量に大きな影響を与えることから、高温時の灌水や除草の徹底など、今後の栽培管理ポイントを再確認するため、農業普及課は、7月30日に円空さといも栽培研修会を開催し、新規栽培者13名を含む多数の生産者が参加した。

研修会では、毎年高品質・多収量のは場を視察し、栽培管理のポイントや作業の省力化の方法等について確認するとともに、活発な意見交換が行われた。

今後も、品質と収量の向上を目指し、研修会の開催等支援を継続していく。



【栽培研修会の様子】

売れる農畜産物づくり

岐阜農林 ■ 枝豆 **「岐阜えだまめ」のPRに向けて**

J A ぎふえだまめ部会では、7月10日にがんばる園芸産地育成支援事業を活用し、えだまめ生産者と流通関係者の意見交換会を行なった。

農業普及課は、防虫ネット栽培等によるぎふクリーン農業の取組について説明した。

また、7月13日には、岐阜市曾我屋の圃場で約1,000人の消費者が参加して、えだまめ収穫体験会が盛大に開催された。収穫体験会では、一般公募の消費者約300人から選ばれた「岐阜えだまめ」イメージキャラクターの発表も同時に行われ、最優秀賞、優秀賞の表彰式が行われた。今後は、「岐阜えだまめ」のPRに向けた活用が期待される。

農業普及課では、収穫体験圃場の管理指導やキャラクターの募集方法、体験会の進め方など、計画当初から会の企画運営等について支援を行ってきた。



【イメージキャラクター最優秀賞】

西濃農林 ■ トマト **海津トマト部会販売反省会の開催**

海津トマト部会は、6月28日に販売反省会を開催し、平成25年産(平成24年9月23日から平成25年6月10日まで)の出荷・販売の実績と課題について、J A 全農岐阜、J A にしみの、市場関係者から報告があった。

販売実績は、過去最高の販売額であった平成24年産と比べ、出荷量が107%増加したものの、単価が82%と下回り、最終販売額は88%の13億円弱になると見込まれる。

課題は、5月以降の高温期の日焼け果、軟果による品質低下対策である。そのため、農業普及課では、高温対策として遮光、かん水などの技術について説明を行った。

揖斐農林 ■ 大豆 **ほ場の排水条件を改善(大豆・麦等生産体制緊急整備事業)**

岐阜県農業再生協議会では、大豆の生産性向上に向け大豆・麦等生産体制緊急整備事業で栽培ほ場の排水性改善に取り組んでいる。

農業普及課では、再生協議会と連携して、7月17日に揖斐川町北方地区の50aの水田で弾丸暗渠※1を設置した。

大豆のは種に先駆けて振動式サブソイラと弾丸をクローラー型トラクターに設置してほ場の縦、横、斜めに動かし、深さ30cmで暗渠を設置するとともに、額縁明渠※2につないだ。

処理を行った水田は、作土深が15cmと浅く、水はけも良くないことから、大豆の栽培には不向きであるが、弾丸暗渠を設置することで、停滞水が速やかに排出される。



【サブソイラと弾丸を引くトラクター】

生産者からは、「この機械であれば、^{れき}礫が多いほ場でも使えるため、使ってみたい」との感想も聞かれる等、好感触であった。

農業普及課は、今後処理を行った水田における大豆の生育・収量調査等を、生産者と協力して行い、弾丸暗渠の効果の確認と普及を進めていくこととしている。

※1 弾丸暗渠：トラクター等で弾丸型の金属器具を引き、田畑の土中に下水管のような穴を作る技法

※2 額縁明渠：ほ場の周囲に掘る排水溝

可茂農林 ■大豆 **摘心処理による「青立ち」防止の実証（新技術導入広域推進事業）**

農業普及課では、白川町で近年大きな問題となっている大豆の「青立ち」※の防止に向け、昨年に引き続き農業革新支援センター、試験研究機関とともに、摘心処理の実証を行っている。

7月3日及び12日に実証展示ほで、トラクターにつけた摘心機等で上部を刈り取る摘心処理を実施した。今後、生育・収穫調査等を行い、最適な処理時期等を明らかにし、青立ち防止技術の確立と普及を進めていくこととしている。



【摘心作業の様子】

※ 青立ち：莢が成熟しても茎葉が青いまま残る現象、汚損粒の発生による品質低下や減収の原因となる。

恵那農林 ■夏秋トマト **東美濃トマト産地の活性化を目指して！～技術部会の取り組み～**

東美濃夏秋トマト生産協議会技術部会では、産地活性化計画に基づき、安定出荷に向けた品種比較、土壌水分の安定化、規模拡大のための着果促進処理の省力化など7つの課題に取り組んでおり、それぞれの課題解決に向けた試験の実施を農業普及課が支援している。

7月23日には技術部会員やJA営農指導員など20名が参加して現地検討会が開催された。各課題を担当する技術部会員からそれぞれの試験内容と取組の概要説明を受けた後、参加者全員で効果の確認と問題点などについて検討を行った。

農業普及課では、引き続き試験の実施に協力し具体的な改善対策の確立を目指すとともに、技術部会の取組が産地の活性化につながるよう支援していく。



【試験状況について説明する技術部会員】

農業経営課 ■キュウリ **「黄化えそ病」対策の研修会を開催**

海津市キュウリ部会では、8月1日に部会員約40名を対象とした「黄化えそ病」対策研修会を開催した。本地域では2年前、本病のため施設栽培キュウリが壊滅的な被害を受けたことから、西濃農林事務所、試験研究機関、農業革新支援センター等、関係機関が緊急対策チームを作り対策技術の確立と実証普及を進め、昨年度は被害を激減させることが出来た。

研修会では、農業革新支援専門員から、引き続き被害の発生を抑えるために、本病を媒介する害虫のスリップスの撲滅やハウスへ持ち込まない取組など、改めて生産者が取り組むべき対策について説明した。出席者からは各対策技術の意義等の質問が出されるなど、活発な討論が行われた。



【スライドで対策を説明】

多様な担い手の育成・確保

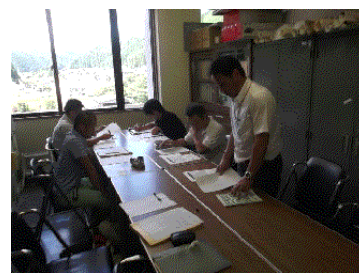
郡上農林 ■新規就農希望者 **農業大学校生の新規就農相談会を開催**

農業大学校2年生の学生が、次年度郡上市で冬春イチゴでの就農を希望しているため、農業普及課では、郡上就農支援協議会に働きかけ、7月18日に協議会主催の新規就農相談会を開催した。

相談会では、本人から就農に向けた想い、計画等の聞き取りを行うとともに、就農に向け必要な準備（農地、住居、資金）について説明した。また、関係機関（郡

上市、J Aめぐみの、農林事務所)が、就農に向けた支援方策等今後の対応策について検討を行った。

今後は、本人の目指す経営概要を明確にするために、10月を目途に就農計画の作成を農業大学校とも連携を密にし、支援をしていく。



【就農相談会の様子】

下呂農林 ■ 新規栽培者 **トマト収穫体験研修会を開催**

下呂市蔬菜出荷組合トマト部会では、下呂地域担い手育成総合支援協議会(下呂市、J Aひだ、下呂農林事務所)の支援により7月17日にトマト収穫体験研修会を開催した。研修会には、今年からの新規栽培者、農業研修生、農業に関心のある方等7名が参加した。

夏秋トマトの栽培者数は、高齢化等により年々減少傾向にあったが、今年度は2戸、来年度以降も複数の新規栽培者が誕生する見込みで、産地復活の気運が高まってきている。



【トマトの収穫体験】

飛騨農林 ■ ほうれんそう **飛騨ほうれんそう部会「若菜会」が夜間勉強会を開催**

7月18日にJ Aひだ営農管理センターで飛騨蔬菜出荷組合ほうれんそう部会の若手からなる「若菜会」の第1回夜間勉強会が行われた。

この勉強会は、生産技術の基本をしっかりと学ぶことで、温暖化など環境変化に対応できる力を身につけようと、農家からの要望がきっかけで始まった。農業普及課は、カリキュラム構成や講師を勤める等、その開催を支援している。

当日は35名の若手農業者が集まり、土壌肥料の基礎について皆で学んだ。農薬の使用方法や特性など、多岐にわたるテーマの勉強会を計画している。



【夜間勉強会の様子】

魅力ある農村づくり

東濃農林 ■ 鶴里町柿野地区集落営農組合 **営農が本格始動**

柿野地区集落営農組合(平成25年3月18日設立)は、組合設立を機に毎月11日に定例会を開催することとなり、7月11日に第4回定例会を鶴里公民館で開催した。

円滑な営農活動を行うには、定例会による組合員相互の情報共有を図るとともに、方針を明確にしながら、活動内容の検討を行う必要がある。時には意見の相違もみられるが、丁寧に説明し理解を求める組合長の姿勢も板についてきた。

補助事業を活用した機械導入による、水稻受託面積の拡大についても検討され、集落に対して組合活動への更なる理解と協力が得られるよう働きかけていくことで合意した。

一方、市、J A、農林事務所で構成する「集落営農組織化支援チーム」は、7月9日に会合を開き、柿野地区の集落営農ビジョン(案)や支援方策について意見交換した。今後、集落営農のビジョン形成等持続的な営農活動に向けた支援を実施していく。



【定例会の様子】